

町内遺跡15

平成10年度町内遺跡発掘調査概要報告書

1999

新富町教育委員会

序

新富町の文化財保護については日頃から深い御理解をいただき厚く御礼申し上げます。

本年度も町内の開発行為にともなう埋蔵文化財の発掘調査を実施しました。

越田遺跡では弥生時代中期前半の土器が出土し、資料の少ない当該期の類例を増やすことができました。祇園原地区遺跡では円墳の周溝が3基検出され、祇園原古墳群の全容を明らかにしていく基礎資料を着実におさえつつあります。

本町は今後も貴重な文化財の保護を推進し、豊かな情操教育に活用していく考えです。

最後になりましたが、調査に際してお世話になった関係各機関の方々に深く感謝を申し上げます。

平成11年3月

新富町教育委員会

教育長 清 郁 雄

例　　言

1. 本書は平成10年度に宮崎県児湯郡新富町で新富町教育委員会が実施した町内遺跡緊急発掘調査の概要報告書である。第2章の越田遺跡は遺物総量も少ないためこれを本報告とし、他は概要報告にとどめて本報告書を刊行する予定である。
2. 発掘調査は国庫補助事業「町内遺跡発掘調査等」を適用して行い、報告書作成経費もそれによっている。
3. 発掘調査体制は以下のとおりである。

○総　　括	清　　郁雄	(新富町教育委員会教育長)
	國師　　勉	(同　　社会教育課長)
	富田　次男	(同　　社会教育課長補佐兼社会教育係長)
○庶　　務	山崎　和子	(同　　社会教育課副主幹　庶務担当)
○調整・調査	有馬　義人	(同　　社会教育課主事　文化財担当)
○調査補助員	新森　美穂	(同　　社会教育課嘱託　埋蔵文化財調査補助員)
○指導	重山　郁子	(宮崎県教育庁文化課埋蔵文化財係)
○参加学生	松永　幸寿	(宮崎大学教育学部人文社会課程社会文化専攻4年生)
○作業員	小守　容子、大原　一彦、杉尾美千子、日野　仁美、野尻　富子 滝口　則雄、滝口恵美子、日野　君代、岩下ヨシ子、高山富貴子 新恵トシ子、倉永　喜、宝崎　忠明、芳野　大、出井　ケニ 宮ヶ中千穂、河野　隆子、長友　幸枝	

4. それぞれの発掘調査期間は1.はじめに「VI. 平成10年度町内遺跡発掘調査概要」の表1に掲載している。
5. 本書に掲載する遺構の実測は、有馬義人、新森美穂、小守容子、大原一彦がおこなった。
6. 本書で使用する写真はすべて有馬が撮影した。
7. 整理作業は有馬、新森、小守で行い、第2章越田遺跡出土遺物の実測・トレースはすべて新森がおこなった。
8. 本書で使用した位置図は国土地理院発行の2万5千分の1図を基に作成し、調査範囲図はそれ平板実測にて200分の1の測量図を作成している。
9. 本書で使用する方位は座標北(座標第II系)であり、レベルは海拔絶対高である。
10. 本書の執筆・編集は第2章を新森が行い、ほかはすべて有馬が行なった。
11. 出土遺物その他の記録はすべて新富町教育委員会社会教育課に保管してある。

本文目次

1. はじめに	1 ~ 6
2. 越田遺跡	7 ~ 10
3. 紙園原地区遺跡(第2次・第3次)	11 ~ 16
写真図版	17 ~ 22

1. はじめに

I. 新富町の位置と現況

新富町は宮崎県中央部の日向灘沿岸に面し、県庁所在地である宮崎市から約20km北に位置している。北西部から南東部にかけては一ヶ瀬川が蛇行しつつ東進し、その流域左岸部の沖積平野と標高70~90mの台地面にかけて町域を有する。

隣接する市町村は西に西都市、北に高鍋町、南に佐土原町で、町域は南北約7km、東西約9km総面積が約61km²である。

主幹産業は酪農や園芸を中心とした農業であり、台地の中央部には自衛隊新田原基地があるため、「やさしいと基地の町」というイメージが強い。

人口は平成8年4月現在で18,053人であるが、近年の道路交通網の整備とともにない宮崎市への通勤時間が短くなったことや宮崎市周辺の不動産価格の高騰により、本町での宅地開発が活発となつたため人口も緩やかな増加傾向にある。

II. 地理的環境

新富町が位置する宮崎平野は九州でも筑紫平野に次ぐ平野面積があり、なかでも台地の占める割合が高い。これら台地の形成は第4紀中期更新世初頭（70万年前）からの九州山地の隆起に始まり、氷河期と間氷期の連続による気候の変化が海面の上昇・下降による土砂の堆積・侵食をより著しい段丘化が進行していった。

現在の段丘面は大きく11面に区分でき、古い順に椎原面、久木原面、茶白原面、三財原面、新田原面、西都原面、豊原面、大淀面、国富面、三日月面、完新世段丘面と呼ばれる¹⁾。これらのうち新富町の台地面の大部分は三財原・新田原面に属し標高70~90mの広大な平地が広がる。

沖積平野部に目を向けると、上記の段丘面が脆弱な部分から開析されて形成される急峻な谷の底部（日置川、鬼付女川流域）と、一ヶ瀬川流域沿いの低位段丘面、海岸部の4~5の砂丘列に区分でき、それぞれ有効な土地利用を可能としている。

III. 歴史的環境

① 旧石器時代

遺跡の分布は新田原台地上が多く縄文時代草創期の遺物を含む。発掘調査された遺跡は4箇所と少なく、いずれもアカホヤ層下から集石遺構とともに遺物が出土した例が多い。

町内最古の例としては溜水遺跡で出土したナイフ形石器があり²⁾、その他の遺跡では細石器が多い。町内では古い資料が少ないと、近隣地域で前期~中期の石器が検出される例が増えつつあるため、今後の調査を徹底したい。

ところで町内出土の細石器の多くは1980年代に大野寅夫氏によって本町大字新田字畦原を中心に行われた表採・分類された「畦原型細石器」と呼ばれるもので、南九州を代表する標識資料となっている³⁾。

② 縄文時代

これまで5つの遺跡で調査例があり、検出された遺構の多くは集石遺構である。時期も旧石器から縄文草創期までが多く、前期以降の遺跡は少ない。

集石造構は瀬戸口遺跡で確認された掘り込みをともなうものが大半で、押形文土器、隆起線文土器、貝殻条痕文土器などが出土している⁴⁾。現在のところ集落や生活形態を復元できるまでの資料がない。

③ 弥生時代

前期の遺跡例に板付Ⅱ式併行期の壺が表採された今別府遺跡がある⁵⁾。この遺跡と同様に前期から中期前葉までの集落は、日向灘に面した砂丘列上や台地端部そして河岸低位段丘面に営まれた例が多い。日向地方の稻作開始期にあたるこの時期の水田經營は河川流域にありながらも灌漑技術の未成熟さから谷地からの湧水を利用したものが予想される。

中期後葉から後期になると集落の立地が内陸化する傾向にある。新田原遺跡では堅穴住居12軒が谷地形を挟んだ微高地にあり、湯之宮遺跡などはさらに内陸に位置する。この時期の土器には瀬戸内地域との活発な交流を示す影響が認められ、それらの交流から刺激された在地的な花弁状住居が出現する時期でもある⁶⁾。

後期から終末期の集落は調査例が少ない。しかしながら風早遺跡⁷⁾の灌漑施設やその周辺の遺物の流入などから谷部を中心に水田經營を進めていた状況が想定でき、方形周溝墓・円形周溝墓を含む195基の土壙墓が発見された川床遺跡⁸⁾では西日本全域に及ぶ広域的な交流が予想される。

④ 古墳時代

前期の遺跡として海岸部の丘陵上に立地する下屋敷古墳がある。墳丘は前方後円形を呈し内部主体が組合せ式木棺の日向地方最古の古墳と推定されている⁹⁾。集団の墓域である川床遺跡とは単独で立地し埋葬者が単体であるなど、被葬者の集団内での階層的差異が見られる。

やや時期がくだって山ノ坊古墳群、塚原古墳群、祇園原古墳群では墳丘50m以下の中小の前方後円墳が継続して築造されるようになる¹⁰⁾。ところで前期の一つ瀬川流域には西都原台地を中心として多くの首長墓系譜が存在する。これらはそれぞれのグループを圧倒する規模ではなく、特に西都原台地上では複数の系列が台地上を共有して造墓活動をおこなっている¹¹⁾。町内の古墳群も同流域での一勢力と理解できる。集落には山之坊古墳群と近接して銀代ヶ迫遺跡があり、住居7~8軒で集落を構成しているが¹²⁾、前方後円墳を築造しする首長層の集落とは考えがたい。

中期になると西都原台地上に女狭穂塚古墳・男狭穂塚古墳が登場し、同時に一つ瀬川流域を含む日向地方全域において古墳群規模の拡大や縮小ないし断絶が認められる。このことは日向地方の首長層の再編を意味し両古墳の被葬者が日向地方全域の盟主となったことを想定させる¹³⁾。

町の北西部にある祇園原古墳群はこの変動以後に前方後円墳が継続して築造された日向地方での最大規模の後期古墳群である¹⁴⁾。同様に6世紀に継続して築造される大淀川流域の下北方古墳群と拮抗しつつや優位な関係を保ち終末期に至ったようだ。

一方、町の東部台地上には上蘭遺跡で集落が形成される。現在町内で確認される5世紀後半からの集落はここのみで300軒以上の住居が確認されている¹⁵⁾。また集落の縁辺や丘陵上には円墳や横穴墓が群集し、集落と墓域の関係を推定できる貴重な事例もある。

⑤ 古代～中世

上蘭遺跡は14世紀頃まで営まれた集落で、町南部の沖積段丘面には古墳時代後期から中世の住居が確認された北田地区遺跡がある¹⁶⁾。しかし町内を含む一つ瀬川流域の古代から中世の集落については資料が少ない。

古代の文献では『倭名類聚抄』(935年)のなかに児湯郡8郷(三納・穗北・大垣・三宅・觀勝・

韓家・平群・都野）があるが現在の新富町に該当する郷はわからない。

その後「日向国図田帳」（1197年）のなかに「湯宮・倍木・新田・下富田・宮頸」の地名が登場する。これらの地は莊園として領有されていたが古代以前から開発され農地を拡大した村々の姿が想像される。

南北朝時代になると関東からの武士や在地豪族の横領などの混乱が続いたようだが、伊東義祐の全盛期には富田城周辺が外城の一つとして支配の重要な位置にあった。

その後島津氏が伊東氏を追いやり支配するが、羽柴秀吉の九州進出によって現在の日置・三納代・上下富田地区が秋月高鍋藩に、新田地区が島津佐土原藩の領地となった。

この時期の集落は山城を中心に集住したものが多く、富田地区、新田地区には山城とその周辺に「麓」や「城元」の地名が残る。また町内で確認される中近世山城は8箇所である。

⑥ 近世以降

近世においての新富町はそれぞれ別個の藩の支配を受けたため、慣習の相違が現在でも見受けられる。江戸終末から明治初頭における現在の新富町域の人口は約6,000人弱であった^①。明治以降に現在の人口になったのは、全国的な人口増加以外に台地上の開拓による入植が理由として上げられる。また行政区画は明治22年に新田村・伊倉村が合併して新田村に、日置村・三納代村・上富田村・下富田村が合併して富田村になる。そして戦後の昭和34年に新田村と富田村が合併して新富町になった。

IV. 平成10年度の町内遺跡発掘調査概要

町内での開発行為は小規模多発化の傾向にある。ほ場整備や土地区画整理などの大規模開発が終息している一方で、市町村道整備や一般農道・用排水・宅地造成などが暫時に進行なわれている現状である。

これら小規模開発の背景には国道10号線や日向大橋などの宮崎市域との交通アクセスが完備されつつあることや、近く着工予定の東九州縦貫道整備とともに今後交通アクセスのスマーズ化が要因として上げられる。新宅着工件数も不況下にあって順調であることとも関係するだろう。

しかし、これら暫時の開発行為は埋蔵文化財保護との調整をより煩雑なものとし、本町では周知外の埋蔵文化財の確認が遅延している現状にあるため、残念ながら場当たり的な調整となっている。

今後はより重点的に開発行為の早期把握と徹底した試掘調査で、町内の埋蔵文化財の所在を周知化させることが肝要である。

本年度の文化財部局の調査は農道整備の調査が1件、県道の拡幅工事にともなう民家の移築による調査が1件、民間の土砂採取が一件となっている。

【注】

- (1) 長岡伸治「後期更新世における宮崎平野の地形発達」『第4紀研究』25-3 1986
- 早田努「三 宮崎平野の地形発達史」『宮崎県史』通史編 原始古代 1997
- (2) 吉本正典「滝水遺跡」『新富町文化財調査報告書』第18集 1995
- (3) 茂山謙・大野虎男「児湯都下の旧石器」『宮崎考古』第3号 1977
- (4) 日高孝治「轍戸口遺跡」『新富町文化財調査報告書』第4集 1986
- (5) 有田辰美「新富町の埋蔵文化財」『新富町文化財調査報告書』第1集 1982

- (6) 石川悦雄「新田原遺跡」『新富町文化財調査報告書』第4集 1986
 (7) 有田辰美「風早第I・II遺跡」『新富町文化財調査報告書』第14集 1992
 (8) 有田辰美「下屋敷古墳」『宮崎県史』資料編 考古2 1993
 (9) 有田辰美「川床遺跡」『新富町文化財調査報告書』第5集 1986
 (10) 有馬義人「5 新田原古墳群」『宮崎県史叢書 宮崎県前方後円墳集成』 1997
 (11) 柳沢一男「日向の古墳時代前期首長墓系譜とその消長」『宮崎県史研究』第14号 1995
 (12) 近藤協「銀代ヶ追遺跡」『新富町文化財調査報告書』第13集 1992
 (13) 注11文献
 (14) 注10文献
 (15) 谷口武憲「上蘭遺跡F地区」『新富町文化財調査報告書』第18集 1995
 (16) 有田辰美・有馬義人「北田地区遺跡」『新富町文化財調査報告書』第17集 1995
 (17) 黒木正文「第1章 行政 第1節 六村時代」『新富町史』通史編 1992

表1 平成10年度 町内遺跡調査一覧

番号	遺跡名	周知有無	遺跡時代	調査原因	原因者	調査内容	調査主体	調査期間
1	越田遺跡	周知	弥生	土砂採取	黒木建設工業	本調査	町	H10 4/27~ 6/5
2	新田原58号墳	周知	古墳	史跡整備	町	調査	町	H10 7/6~H11 3/31
3	鬼付女川	周知	弥生~	河川改修	高鍋土木	慎重工事	県	H10 8/19
4	祇園原地区遺跡第2次	周知	古墳	住宅移築	本部雅裕	本調査	町	H10 8/3~ 8/14
5	祇園原地区遺跡第3次	周知	古墳	一般農道整備	児湯農振局	本調査	町	H10 10/19~12/11
6	祇園原地区遺跡	周知	古墳	排水工事	児湯農振局	現場立合	町	H10 9/15
7	祇園原地区遺跡	周知	古墳	畜舍移築工事	本部	試掘調査	町	H10 9/20
8	春日地区遺跡	周知	旧石器~古墳	県道拡幅	高鍋土木	試掘調査	県	H11 2/23~ 3/23
9	一丁田遺跡	周知	弥生	県道拡幅	高鍋土木	現場立合	県	H11 3/16

※調査内容は次のとおりに区分した。

- ①予備調査：分布調査=遺跡の範囲を確認するもの。
 現状調査=現状の地形など測量するもの。
 試掘調査=遺跡の有無を確認するため部分的なもの。
 確認調査=遺跡の内容を確認するための部分的なもの。

- ②本調査：遺跡の内容を記録として残すための全面的なもの。



- | | | | | |
|------------|------------|-------------|------------|-----------|
| 1. 藤掛遺跡 | 2. 上日遺跡 | 3. 上齋遺跡 | 4. 越田遺跡 | 5. 鎧遺跡 |
| 6. 今別府遺跡 | 7. 風早遺跡 | 8. 富田1号墳 | 9. 下里敷遺跡 | 10. 富田下ノ城 |
| 11. 北田地区遺跡 | 12. 富田上ノ城 | 13. 塚原古墳群 | 14. 竹ヶ山城 | 15. 潟之宮遺跡 |
| 16. 山之坊古墳群 | 17. 七又木遺跡 | 18. 八幡上遺跡 | 19. 銀代ヶ追遺跡 | 20. 新田原遺跡 |
| 21. 有峰城 | 22. 抵園原古墳群 | 23. 抵園原地区遺跡 | 24. 川床遺跡 | |
| 2・3次 | | | | |

図1 平成10年度町内遺跡発掘調査位置図



2. 越田遺跡

I. 調査の経緯

平成9年3月、建設業者から「新富町大字日置字越田において土砂採取を行いたい」との申請が町耕地課へ持ち込まれた。当初、この事業については、①土砂搬出のトラックの運行が既に整備された農道を通り、かつ搬出に際しては用水路に橋脚を設置しなければならないこと、②森林法上の開発行為に抵触するかどうか、③都市計画区域内であることなどの問題点があつたため、関係各課や児湯農林振興局等へ連絡し事業に対する協議会を設置し、埋蔵文化財に関して社会教育課が参加した。

協議の結果、いずれの問題についても申請事務等を行なえば事業は滞りなく行なえることとなつたが、事前の県文化課との現地踏査の際に土器片が採集されていたため、埋蔵文化財の調査は行なうこととなつた。

工事予定面積は約8,000m²で、大半は2本の谷が入り込む傾斜面である。平坦面は対象地の中央を占める尾根筋で約500m²であったため、ここを全面調査し、他についてはバックフォーによる試掘で対応することとした。

II. 遺跡の位置と周辺遺跡

調査区は南北に続く丘陵性台地から東側に派生した舌状丘陵部にある。丘陵性台地の本体は日向灘を見渡せる位置にあるが、今回の調査区はそこから内陸へ派生する舌状丘陵の1つで、台地面と日置川流域を見下ろす位置にある。

遺跡の位置する日置川の流域は宮崎県でも早い時期の弥生時代の遺構が多い。日置川・鬼付女川の河口部と海岸段丘上には板付Ⅱ式の壺が表採されたという今別府遺跡があり、同じく近接して中津遺跡、鬼付女西遺跡がある。また日置川対岸の台地面には鎧遺跡があり、今回の調査区と同様に丘陵性台地の瘦せ尾根上に位置している。

III. 調査の概要

越田遺跡は現在の水田面から高さ約30mの東西にのびる舌状の丘陵性台地上に立地し、周囲の尾根筋には富田古墳群のB・Cグループが存在する。このことから調査区自体が墳丘である可能性もあったため、発掘調査着手前の微地形を記録する目的で等高線間隔25cmの全体測量図を1/200スケールで作成した。

次に東西を軸とした基準杭を5本設置し、各杭から南北に直交するよう1~5トレンチを、基準杭に沿って東西に8・9トレンチを、さらに6・7トレンチを2m北にずらしてそれぞれ設定した(図2参照)。

各トレンチの地山までの深さは頂上部の平坦面で約5cm、斜面部で約10~40cmであった。7トレンチでは土器片が集中して検出されたため、東西の2~3トレンチ間に全面にわたって表土を除去し、1個体分の甕を検出するにいたった。しかしながら、これに付随する遺構はまったく認められないため、1~4トレンチまでを広げて表土を除去し遺構検出に努めたが、ついに遺構はなかった。出土した土器片は総数で大小100数片で、7トレンチを中心に集中し、一部埋土にも含まれていた。

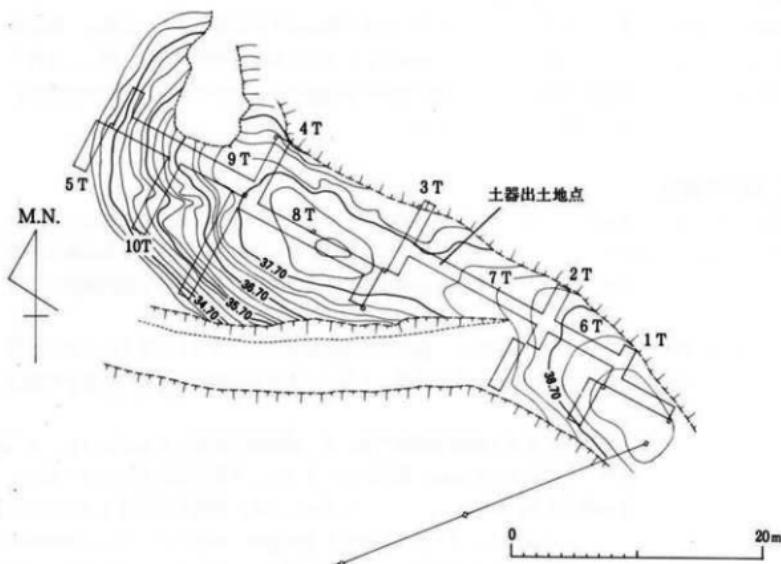
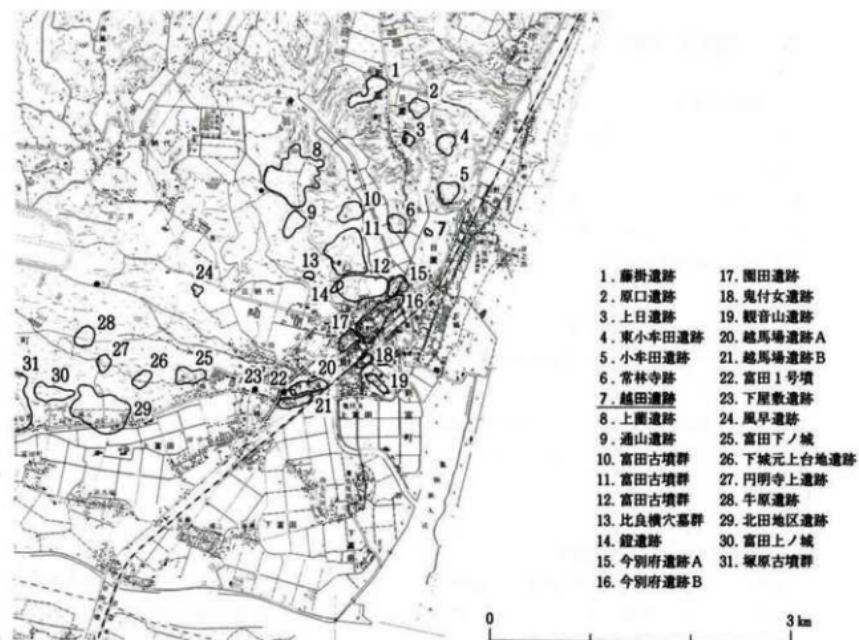


図2 越田遺跡位置図および調査区全体図

IV. 出土遺物 (図1. 1~4)

出土した遺物は弥生土器で断片的なものばかりであったが、7トレンチから出土したもの（図3-1）は口縁部から胴部にかけて器形を復元できた。以下でそれぞれ特徴を述べる。

1は下城式の壺の古いタイプと考えられる。推定口径26cm、現存高20cm、全体の約4分の1弱が遺存する。口唇外縁と口縁部直下の突帯に刻み目が同時に施されている。胴部にも刻み目のある三角突帯を1条めぐらす。胴上半部から口縁部にかけてはゆるやかに内湾する。外面はわずかにハケ目調整が、内面はナデ調整が認められ、胎土には径2~3mmの茶色の砂粒を中量、径1mmの茶灰色の砂粒を多めに、径1mmの白色透明の砂粒・径3~4mmの灰・白色の砂粒をわずかに含む。焼成は良好で色調は明赤褐色を呈する。内面の下半部に黒斑がある。

2は壺の底部片で、接合痕が明瞭に認められる。風化がすんでいるが、外・内面ともナデによる調整が認められる。胎土中には径1mmの白色透明の砂粒・径2mmの茶色の砂粒を多く、径4mmの小石を小量含む。焼成は良好で色調は淡黄褐色を呈する。

3は壺の口縁部片で、胴部へと続く箇所に破線状の沈線が施される。外・内面はナデ調整が認められ、胎土中には径2mmの茶灰色の砂粒を小量、径1mmの白色透明の砂粒をわずかに含む。焼成は良好で色調は淡黄褐色を呈する。

4は壺の口縁部片で、口唇平坦部には列点文が施されている。外・内面はナデによる調整が認められ、胎土中には径2mmの白色透明の砂粒を小量、径2mmの灰色砂粒をわずかに含む。焼成は良好で色調は淡赤褐色を呈する。口縁は外反し、その内面には三角突帯がある。焼成は良好で、胎土には径2~4mmの小石を多く含む。色調は内外面ともに淡明褐色を呈する。小片であるため傾きが不明であるが、外反する口縁と内面に突帯を有する形状から、鋸先状の口縁へ移行する段階のものだろう。

表2 越田遺跡出土土器観察表

遺物番号	種別	器種部位	法量(cm)			手 法		色 調		胎土・焼成の特徴
			口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面	
1	弥生土器	壺 口縁 ~胴部	26	-	-	ナナメ ハケ	丁寧な ナデ	明赤褐色 部分的に 黒斑	明赤褐色 部分的に 黒斑	2~3mmの茶色砂粒中量。1mmの 茶灰色砂粒多量。1mmの白色透明。 焼成堅緻。
2	弥生土器	壺 底部	-	-	-	ナデ	ナデ	淡黄褐色	淡黄褐色	1mmの白色透明の砂粒、2mmの 茶色砂粒多量。4mmの小石を小 量含む。焼成良好
3	弥生土器	壺 頸部	-	-	-	ナデ	ナデ	淡黄褐色	淡黄褐色	2mmの茶灰色砂粒を小量。1mmの 白色透明砂粒をわずかに含む。 焼成良好。
4	弥生土器	壺 口縁部	-	-	-	ナデ	ナデ	淡明褐色	淡明褐色	2mmの白色透明の砂粒を小量。 2mmの灰色砂粒をわずかに含む。 焼成良好。

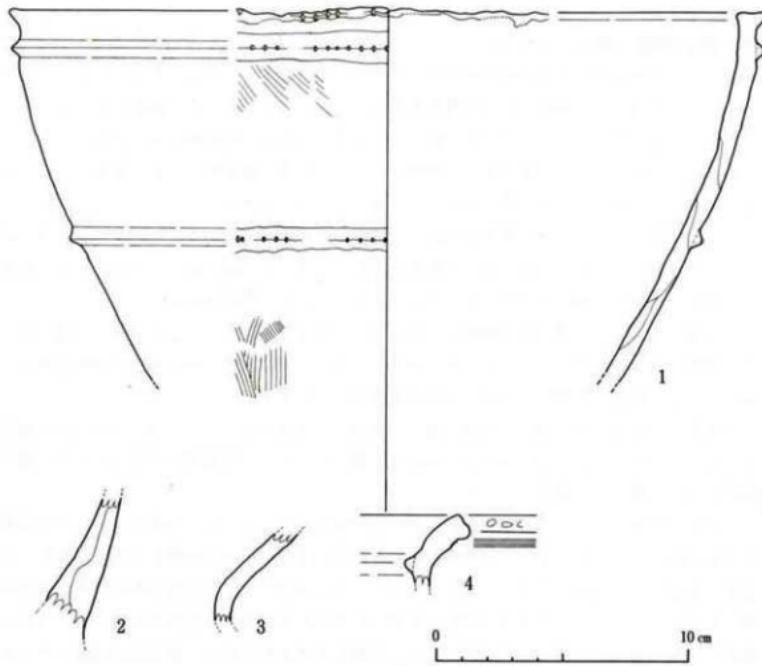


図3 越田遺跡出土土器

V.まとめ

今回の調査では遺構が検出されなかった。出土した遺物も小量ではあったが、特徴的な土器片が2点みられた。

図3-1に類似する土器は新富町鎧遺跡¹⁾、高鍋町持田中尾遺跡²⁾、高崎町今村遺跡³⁾で出土しており、石川氏の編年⁴⁾⁻⁶⁾によるⅡa期にあたる。図3-4は同じく編年のⅠc期以降にあたるものと考えられ、鎧遺跡、持田中尾遺跡でもこれに類似する土器が出土している。いずれの土器も年代的には弥生時代中期初等～前半に比定される。

注目すべきことは先述した鎧・持田中尾・今村遺跡も本遺跡と同じく丘陵性台地上に立地している点である。特に鎧遺跡は谷を挟んだ向かい側の丘陵性台地上にあるので、この周囲の調査がすすめば、宮崎県における弥生時代の集落変遷を解明する上で、さらに有効な資料となる。

今後も同様の開発行為に注意しておきたい。

【註】

- (1) 面高哲郎「鎧遺跡・藤掛遺跡」『新富町文化財調査報告書』第2集 1983
- (2) 北郷泰道「持田中尾遺跡」『高鍋町文化財調査報告書』 1982
- (3) 茂山護「今村遺跡」『九州縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書』第3集 1972
- (4) 石川悦雄「宮崎平野における弥生土器編年試案」『宮崎県立総合博物館研究紀要』No.8
- (5) 石川悦雄「宮崎平野における弥生土器編年試案－素描（M.K. II）」昭和59

3. 祇園原地区遺跡（第2次・第3次）

I. 調査に至る経緯

祇園原地区から春日地区の一带は標高70~90mの台地面で、酪農を営む人家の多い畠地帯である。この一帯のは場整備は昭和43年に春日地区で、次いで平成4年度に祇園原地区で行なわれ、ほぼ全域にわたって終了している。

この台地面は国指定史跡「新田原古墳群」のうちの154基が密集しており、ほぼすべてが古墳時代の墓域である。最近では両地区的古墳をあわせて祇園原古墳群と呼んでいる¹⁾。平成4年度の祇園原地区のは場整備時には、墳丘が消滅し周溝のみとなったものが36基検出されており、これらを含んだ当地区的埋蔵文化財を「祇園原地区遺跡」として取り扱っている²⁾。

近年になって、東九州縦貫自動車道の工事路線が近くに予定されていることから接続する県道や町道の整備が数多く予定され、あわせては場を結ぶ農道整備が着工予定されることから、関係機関との埋蔵文化財保護上の事業調整を行なってきた。

本年度は人家の移転とともに調査（第2次）と農道整備とともに調査（第3次）を行なった。第2次調査は県道木城西都線の路線拡幅とともに人家を移転する先に指定古墳の周溝があることが予想されたために実施した調査である。

第3次調査は児湯農林振興局からの委託を受けて行なったもので、2路線で計5,000m²を確認調査し周溝が検出された箇所のみ本調査を行なった。なお農道整備とともに調査は来年度以降継続する予定である。

II. 遺跡の位置と周辺遺跡

祇園原古墳群は一ヶ瀬川中流域の左岸台地上に密集する古墳群で、前方後円墳14基・方墳1基・円墳139基の墳丘が遺存している。前述のように、消滅した円墳の周溝が36基検出されているため、現在ではその数190基ということになる³⁾。

古墳の大半は後期のもので、東側の南北につづく傾斜面を利用して築造された12基の前方後円墳群（Aグループ）と西側微高地に密集する群集墳（Bグループ）がある。

特に前者のAグループの前方後円墳群は墳長80~100m弱の大規模なものと墳長50m内外のものに大別でき、表採できる埴輪片や墳丘形態からほぼ同時期に2つの首長墓系譜がこれらを築造したのではないかと考えられる⁴⁾。また台地の北西側端部には前方部が低平で後円部径に対して幅の狭い前方後円墳が2基あり、中期には西都市茶臼原の児屋根塚古墳や同西都原の女狹穂塚古墳と墳丘形態や埴輪の近似する大久保塚古墳があるため⁵⁾、いくつかの古墳築造の断絶を経て、後期に爆発的に墳丘築造が増加することがわかっている。

今回の調査区はいずれもBグループの群集墳内に当たり、以前の調査で検出された周溝群に接する。既に調査されていた周溝の底面から堅抗が掘り込まれた地下式横穴が計4基検出されており、周囲からは馬の埋葬土壙も2基検出されている⁶⁾。

III. 調査の概要

(1) 第2次調査

住宅移転先の約200m²が調査対象である。調査区の南と北はそれぞれ国指定136号墳と137号墳

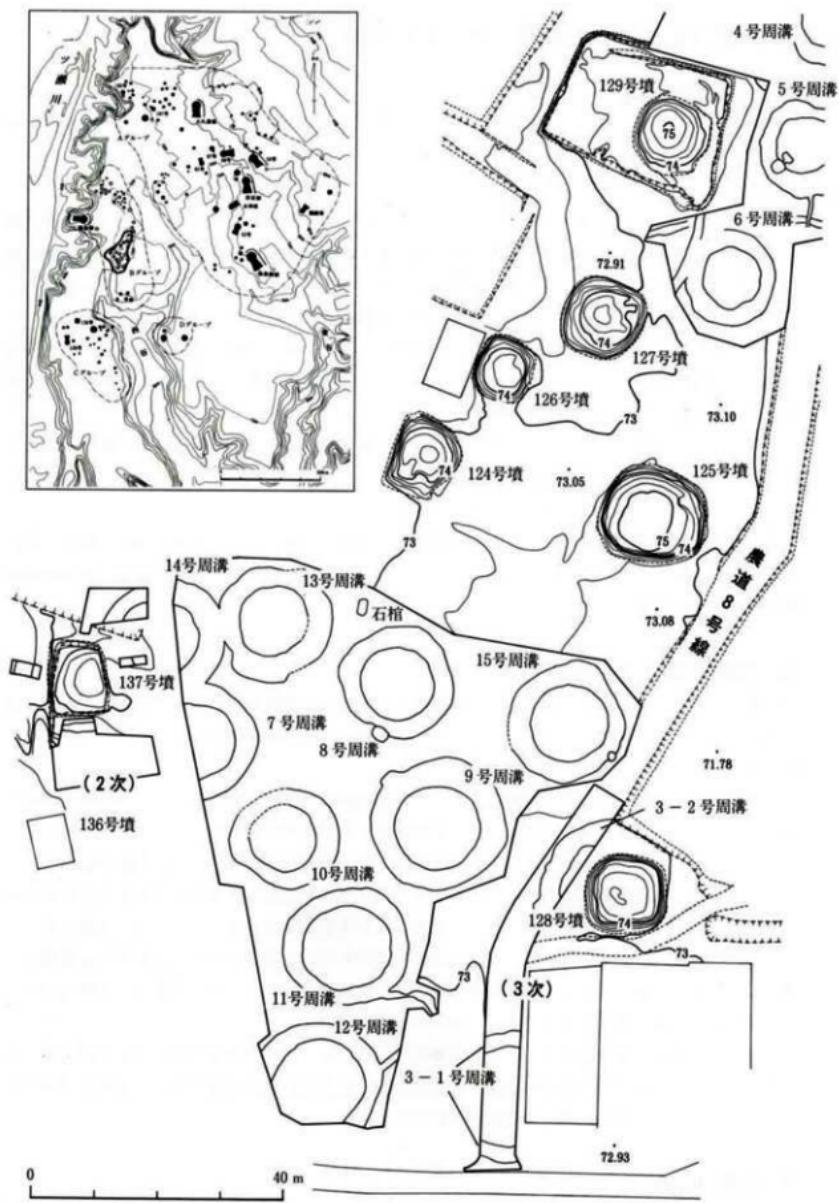


図4 手原地区遺跡第2次・第3次調査位置図

に接している、そこでこれらの墳丘を含む測量図を200分の1スケールで作成した(図4)。次に調査区の中心から東西に国土座標を基にした基準杭を設置し表土除去を人力で行なった。表土を除去しアカホヤ火山灰層を基準に土層の確認をおこなったところ、136号墳に接する南側は以前からコンクリート製の堆肥塚が設置されていたため周溝等の遺構検出は諦めた。

北側については予想された指定137号墳の周溝が検出されたが、調査区の範囲が狭かったため土師器の小片が2~3片出土したのみであった。

(2) 第3次調査

農道整備予定の2路線計約5,000m²が調査対象である。この路線では以前の調査でトレンチを入れた箇所が多く、その箇所については調査対象から外し、ほかについては基本的に表土の除去を優先し、遺構検出箇所については工事を中断することとした。

その結果、9号線と8号線の北半分に関してはすでに深く地山が掘削されているため調査対象から外し、8号線の南半分のみの本調査となった。

本調査区はBグループの南に位置し、平成4年度の発掘調査で周溝が多く検出された場所である。現在その中心は国指定史跡として保護されている。

工事に先立ち表土約50cmを除去するとアカホヤ火山灰層が割合良好に遺存しており、工事対象に沿ってひき続き表土除去を行なった。すると8号線の農道長約50mが未調査区であり、結果円墳の周溝が2基検出でき、これらを仮に3-1号周溝、3-2号周溝とした。

3-1号周溝は1次調査で検出されていた16号周溝にあたり、墳丘は既に失われている。検出できたのは径が求められる部分であったため復元径約16mとなる。周溝掘方は底面の凹凸が激しく断面形は逆台形状を呈する。現存する底面までの深さは50~80cmである。

出土遺物には土師器の高杯、須恵器の杯、甕があるが、いずれも小片で、唯一土師器の甕1個体が周溝底部に潰れた状況で検出されている。

3-2号周溝は国指定128号墳の周溝で今回初めて検出できた。指定128号墳は現存する墳丘は高さ約1.75m、径約13mであるが、周溝をもとに復元すると径約17mにはなりそうだ。周溝は全体に堀方が荒く、いくつかの土壤が連結するように南から北に深くなっているため、現存する周溝の深さは20cm~50cmである。出土遺物は南の浅い部分に集中して須恵器片が検出でき、整理作業の結果、須恵器の脚台付長颈甕1、杯身3、杯蓋3が復元できた。

また調査では周辺の指定墳の測量もあわせて行い、指定124号墳から129号墳の現存する墳丘でデータを補足することができた。

IV.まとめ

今回の調査では平成4年度の1次調査を補う調査結果が得られた。国指定史跡として保存している周溝を中心にBグループの内容をまとめると次ページの表3のようになる。

最近の研究成果からこれらの群集墳は須恵器杯の編年観からT K 10~T K 209併行期にかけて築造され、そのピークはM T 85併行期と考えられている⁶⁾。群集墳の築造時期のほかAグループとの階層性や埋葬施設の採用の違いなどの今後解明する問題が多い。史跡整備のほか、周辺整備が行なわれる当地区では重点的に開発行為との調整を計っていきたい。

【注】

- (1) 有馬義人「5 新田原古墳群」『宮崎県史叢書 宮崎県前方後円墳集成』 1997
- (2) 飯田博之ほか「抵園原地区遺跡」『県営農村整備パイロット事業にともなう埋蔵文化財発掘調査報告書』宮崎県教育委員会 1996
- (3) このほか地中レーダーによって確認されているものもあるが総数にはいれていない。
- (4) 注1文献
- (5) 有馬義人「児屋根塚古墳・大久保塚古墳の円筒埴輪」『宮崎考古』14 1995
- (6) 藤本貴仁「宮崎平野部の群集墳」『宮崎考古』16 1998

表3 抵園原古墳群のBグループのデータ

番号	名 称	墳 丘				周 溝		調査歴	調査年度
		墳形	現状	長径	短径	長径	短径		
1	19号墳	円	×	11.4	—	16.7	16.5	墳丘滅失墳の調査	1993年度
2	20号墳	円	×	10.3	10.3	16.3	14.4	墳丘滅失墳の調査	1993年度
3	21号墳	円	×	8.0	7.5	11.1	9.9	墳丘滅失墳の調査	1993年度
4	22号墳	円	×	11.4	10.8	16.2	15.7	墳丘滅失墳の調査	1993年度
5	23号墳	円	×	12.5	11.5	15.5	15.2	墳丘滅失墳の調査	1993年度
6	24号墳	円	×	12.5	11.6	15.5	15.2	墳丘滅失墳の調査	1993年度
7	25号墳	円	×	7.9	—	—	—	墳丘滅失墳の調査	1993年度
8	26号墳	円	×	—	9.2	11.7	—	墳丘滅失墳の調査	1993年度
9	27号墳	円	×	8.3	8.2	—	10.3	墳丘滅失墳の調査	1993年度
10	28号墳	円	×	5.3	—	7.4	—	墳丘滅失墳の調査	1993年度
11	29号墳	円	×	12.4	—	—	—	墳丘滅失墳の調査	1993年度
12	国指定100号墳	円	○	—	12.5	—	—		
13	国指定101号墳	円	○	12.5	12.5	—	—		
14	国指定102号墳	円	○	15.0	6.5	—	—		
15	国指定103号墳	円	○	10.0	10.0	—	—		
16	国指定104号墳	円	○	10.0	15.0	—	—		
17	国指定105号墳	円	○	15.0	15.0	—	—		
18	国指定106号墳	円	○	16.5	6.5	—	—		
19	国指定107号墳	円	○	12.5	12.5	—	—		
20	国指定108号墳	円	○	12.5	9.0	—	—		
21	国指定109号墳	円	○	10.0	10.0	—	—		
22	国指定110号墳	円	○	12.5	7.5	—	—		
23	国指定111号墳	円	○	7.5	7.5	—	—		
24	国指定112号墳	円	○	11.5	7.5	—	—		
25	1号墳	円	×	12.8	12.1	16.6	15.9		
26	国指定113号墳	前方後円	○	—	—	—	—		

番号	名 称	墳 丘			周 溝		調査	保存	
		墳形	現状	長径	短径	長径	短径		
27	18号墳	円	×	11.0	10.8	20.4	14.3	墳丘滅失墳の調査	1993年度
28	2号墳	円	×	13.8	13.4	—	—	墳丘滅失墳の調査	1993年度
29	3号墳	円	×	12.6	13.4	22.6	—	墳丘滅失墳の調査	1993年度
30	4号墳	円	×	—	9.7	—	13.3	墳丘滅失墳の調査	1993年度
31	5号墳	円	×	9.2	9.0	14.6	14.2	墳丘滅失墳の調査	1993年度
32	6号墳	円	×	9.5	9.4	15.1	15.0	墳丘滅失墳の調査	1993年度
33	国指定124号墳	円	○	—	—	—	—	墳丘測量	1998年度
34	国指定125号墳	円	○	—	—	—	—	墳丘測量	1998年度
35	国指定126号墳	円	○	—	—	—	—	墳丘測量	1998年度
36	国指定127号墳	円	○	—	—	—	—	墳丘測量	1998年度
37	国指定128号墳	円	○	—	—	—	—	墳丘測量・周溝確認	1998年度
38	国指定129号墳	円	○	—	—	—	—	墳丘測量	1998年度
39	国指定136号墳	円	○	—	—	—	—		
40	国指定137号墳	円	○	—	—	—	—	墳丘測量・周溝確認	1998年度
41	7号墳	円	×	12.0	—	—	—	墳丘滅失墳の調査	1993年度
42	8号墳	円	×	11.8	11.5	17.7	17.4	墳丘滅失墳の調査	1993年度
43	9号墳	円	×	13.0	—	—	—	墳丘滅失墳の調査	1993年度
44	10号墳	円	×	10.0	—	—	—	墳丘滅失墳の調査	1993年度
45	11号墳	円	×	14.0	13.0	—	—	墳丘滅失墳の調査	1993年度
46	12号墳	円	×	15.0	—	—	—	墳丘滅失墳の調査	1993年度
47	13号墳	円	×	—	11.0	—	—	墳丘滅失墳の調査	1993年度
48	14号墳	円	×	—	—	—	—	墳丘滅失墳の調査	1993年度
49	15号墳	円	×	11.8	11.5	17.7	17.4	墳丘滅失墳の調査	1993年度
50	16号墳	円	×	16.0	—	20.8	—	墳丘滅失墳の調査	1993・98年度
51	17号墳	円	×	—	—	—	—	墳丘滅失墳の調査	1993年度
52	国指定165号墳	円	○	13.5	13.5	—	—	周溝確認	1993年度
53	国指定166号墳	円	○	15.0	15.0	—	—		
54	国指定167号墳	円	○	15.0	15.0	—	—		
55	国指定168号墳	円	○	17.5	17.5	—	—		
56	国指定169号墳	円	○	17.5	17.5	—	—	周溝確認	1984年度

上表は次の文献をもとに作成した。

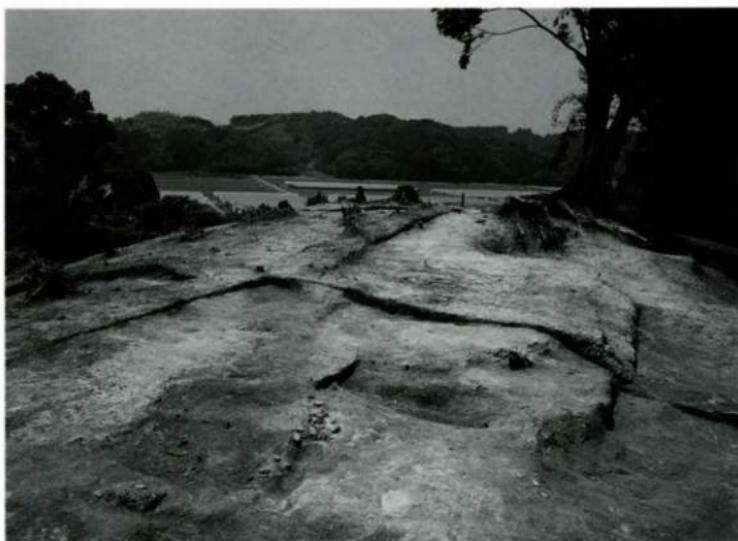
①有田辰美「新田原古墳群」『新富町文化財調査報告書』第10集 1990

②飯田博文「祇園原古墳群」『県営農村基盤整備パイロット事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』1996

③日高孝治「瀬戸戸遺跡」『新富町文化財調査報告書』第4集 1986



1 越田遺跡全景（東から）



2 弥生土器出土状況 逸景

图版2



1 弥生土器出土状况



2 出土土器



1 祇園原地区遺跡 2次調査区全景

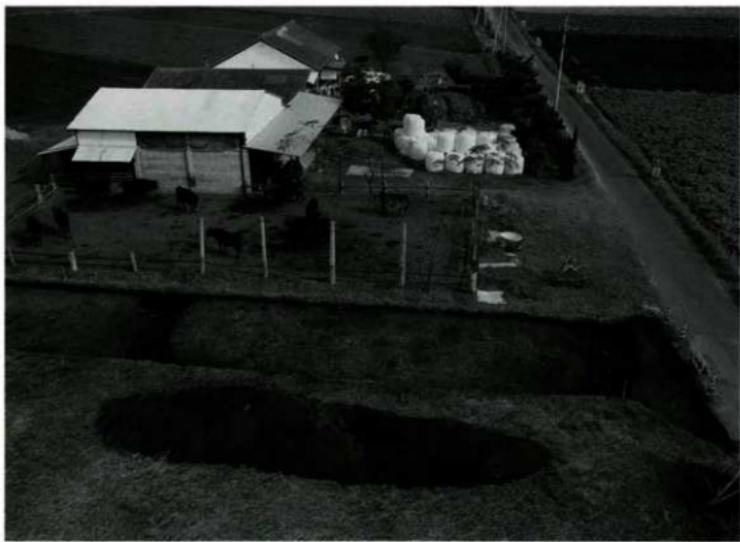


2 祇園原地区遺跡 2次 137号墳周溝

図版4



1 犬園原地区遺跡 3次調査区全景（南西から）



2 犬園原地区遺跡 3次 1号周溝



1 犬園原地区遺跡 3次 2号周溝（国指定128号墳）



2 犬園原地区遺跡 3次 農道路線周囲の円墳

図版 6



1 祇園原地区遺跡 1号周溝土層

報告書抄録

ふりがな	ちょうないいせき					
書名	町内遺跡15					
副書名	平成10年度町内遺跡発掘調査概要報告書					
卷次	15					
シリーズ名	新富町文化財調査報告書					
シリーズ番号	第27集					
編著者名	有馬 義人					
編集機関	新富町教育委員会					
所在地	宮崎県児湯郡新富町大字上富田7491番地					
発行年月日	1999年 3月31日					
ふりがな 所取遺跡名	所在地	コード		調査期間	調査面積	調査原因
		市 町村	遺跡 番号			
越田遺跡	新富町大字日置字越田	47		980427 ↓ 980605	500m ²	土砂採取
紙園原地区遺跡 第2次	新富町大字新田	47		980803 ↓ 980814	200m ²	住宅移転
紙園原地区遺跡 第3次	新富町大字新田	47		981019 ↓ 981211	250m ²	一般農道 整備事業
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
越田遺跡	散布地	弥生時代	なし	弥生土器	弥生中期前半 の土器	
紙園原地区遺跡 第2次	古墳	古墳時代	古墳の周溝	土師器・須恵器	周溝の検出	
紙園原地区遺跡 第3次	古墳	古墳時代	古墳の周溝	土師器・須恵器	周溝の検出	

新富町文化財調査報告書 第27集

町 内 遺 跡 15

発行年月日 1999年3月
発 行 宮崎県新富町教育委員会
印 刷 (有)印刷センタークロダ